

# 徒然草

氏名

平安時代にかかれた清（ ）の「の、筆をとって書く心境は、この書の（序段）にこう記されている。」と並ぶ、わが国の代表的な（ ）文学である。そ

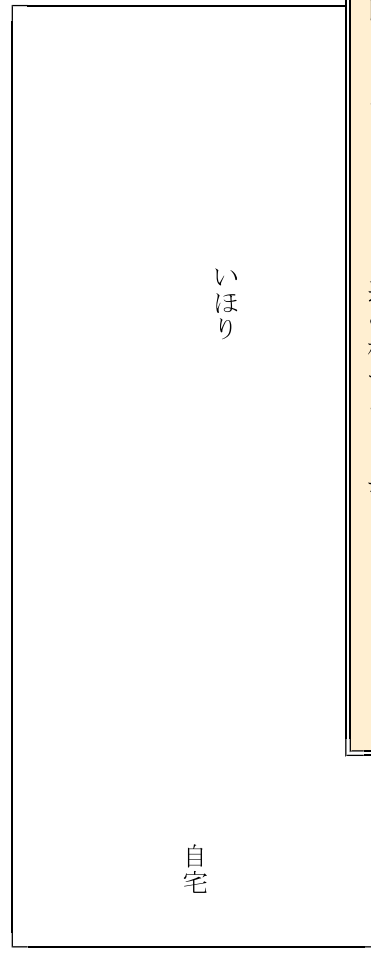
「つれづれなるままに、日暮らし、硯に向かひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。」

つれづれ	……………	退屈
日暮らし	……………	一日中
よしなし事	……………	取り留めもないこと
そこはかとなく	……………	なんというこゝともなく
あやしうこそ	……………	奇怪なことになって
ものぐるおし	……………	（もの狂おしい）……気がおかしくなる

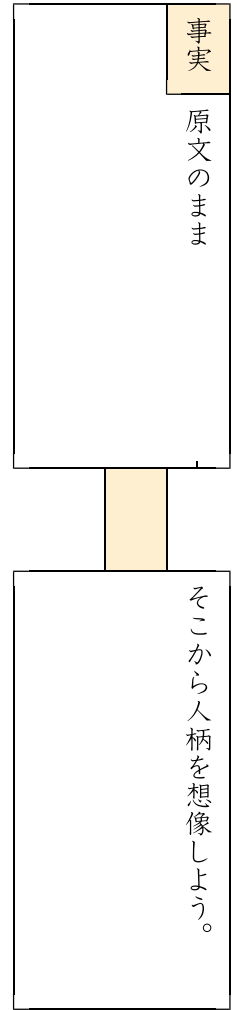
「徒然草」という書名も、この段によってつくられたものと思われる。序段のほか、二百四十三段の文章のなかには、自然や人生についての鋭い観察や深い思索を通して、この時代の知識人に共通の（ ）が表されている。また、世間のうわさ話を書きとめたもの、教訓的なもの、学問的なもの、ユーモアや批判精神に富んだものなど、その内容は豊かで、作者の高い（ ）がうかがわれる。

## 神無月のころ

本文に出てくる地名などを参考にして、「いほり」までの地図をイメージしよう。道の様子なども書くこと。



その「いほり」には、どんな人が住んでいるものと考えられたのですか。



で、実際どんな人だったのですか。

この木なからましかば（ ）

（ ）と思ったわけは何ですか。

木の様子

神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ることはべりしに、はるかなる苔の細道を踏み分けて、心細く住みなしたるいほりあり。木の葉にうずもるるかけひのしづくならでは、つゆおとなふものなし。閑伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよ、とあはれに見るほどに、かなたの庭に、大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかば、と覚えしか。



地面

